

第10回

秀麗富嶽十二景写真コンテスト

入選作品

最優秀賞

朝雲輝く

奈木 正次（静岡県沼津市）

大蔵高丸



白簾史朗氏講評

3番山頂・大蔵高丸からの作品。上空にひろがる朝雲の何層にもなって重なり色づく情景をみごとに捉えている。いつも感心するところだが、もっとも肝心のところをしっかりと押さえ、線とマッス、その配置の格調高さが他の追随を見ないところである。強烈さには欠けるが、美しさは比類ない。

推薦

端然として 小谷 哲朗（三重県松阪市） 本社ヶ丸



白簾史朗氏講評

いままで見た本社ヶ丸からの富士山でこれ以上の作品はない。再募集に際して敢然と遠方から立ち向かった気概がこの美しく、かつ、不動の感あるみごとな作品を生んだのだろう。まさしく端然と立つ富士として気品あふれる秀作である。

推薦

霜の朝

高津 秀俊（山梨県大月市）

大蔵高丸・白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

3番山頂・大蔵高丸の北方、白谷ノ丸からの富士山。大蔵高丸から破魔射場につづく稜線が平坦で富士山の前景にふさわしくない欠点を湧き出た雲でかくし、手前の光を生かしての手法は手なれたとはいえ、みごとの一語に尽きる。雲上の富士の美しさと前景との調和が何ともいえない。ただ題名に一考。

特選

乱雲乱舞

高橋 利延（神奈川県相模原市）

大蔵高丸・白谷ノ丸



白簾史朗氏講評

これまた白谷ノ丸からの作品。これも大蔵高丸の山稜を雲がかくし、さらに雲海が富士をより高く見せるに役立っている。この雪では登るに苦労したろうと思うが、その苦労が見事に報いられている。やや光が西にまわりすぎたため雪に冴えが失われたのが残念。題名も乱雲ではないので注意。

特選

秋景 天野 昭吾（山梨県大月市） 姥子山



白簾史朗氏講評

姥子山からも、これほど美しい富士山はなかなか見られない。秋の澄んだ大気に新雪をいただいた富士山がすっと立っていて、まことにすがすがしい。カラマツの色づきもよく画面を引きしめ、富士山を引き立てている。

特選

春霞

小林 博（山梨県大月市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

1 番山頂・雁ヶ腹摺山から新緑をあしらった春富士。作者の意図はほぼ達成されたかに見える。それにいつも思うことだが、作者の前景と富士山とのからみは絶妙といってよい。春霞の題名どおりの富士山であるが、やはり少し弱い。色数が少ないせいもある。右方を少し切るとさらによくなる。

特別賞

雲海の朝

工藤 敏蔵（静岡県浜松市）

雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

これまた大きな画面である。前景の色づきの美しい発色、大きく広く、やわらかくひろがった雲海、その上にかがやく朝富士。まさに三題話ともいえる舞台装置
完璧な画面である。はるかにも高い富士山に対して、題名が「雲海・・・」では
もったいない。「はるかなる上に」とでもしたいところだ。

入賞

峠の秋 権正 光夫（山梨県富士吉田市） 雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

雁ヶ腹摺山大峠付近からの山の端にのぞく富士山。前景の紅葉が強烈なコントラストを見せて富士に対してしている。題名ぴったりの画面であるが、左方の立木の黒が少し強すぎた。それと少々空があきすぎたのに注意。

入賞

初冬の空に 奈木 正次（静岡県沼津市） 牛奥ノ雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

「・・・空に」という題名は感心しない。空にというときはそこにモチーフがある程度入りこんでいる必要がある。この場合、色調から見ると冬よりは秋、「秋空のもとに」という感じの方が合うだろう。いつもながら画面作りは完璧。

入賞

夜明け 遠藤 潤（山梨県東八代郡） 小金沢山



白簾史朗氏講評

暗雲のもと明け行く小金沢山の朝。「夜明け」では印象が明るすぎる。「昏迷の・・・」「晦冥の・・・」とでもしたいところだ。明暗的に画面が上下に分かれているので、下部を少し切る方がよい。応募票は私製不可。

入賞

晩秋

大賞 正一（神奈川県厚木市）

ハマイバ



白簾史朗氏講評

第9回・御殿場の富士山コンテストの最優秀賞作家。なかなかにすぐれた表現力を持つ作家のひとりといえる。この作品は破魔射場からのものだが、右方ダケカンバの幹に当たった光が生きている。しかし入れ込みが少し足りない。下方を切って上方にのぼすようにフレーミングすると空が高くなり、より秋らしくなる。印画をバウチしないように。

入賞

ミツバツツジ咲く

天野 昭吾 (山梨県大月市)

ハマイバ



白簾史朗氏講評

天野氏は得をした。というのはミツバツツジをモチーフにした作品が他になかったために、文句なしに選ばれたからだ。しかし、作品的に不備だらけなら選ばれないのだから、やはり実力である。もう少し絞りこんで、ピントを富士山まで届かせた方がよい。右方が少しじゃまである。

入賞

甲州路とカノープス 堀井 孝利（山梨県韮崎市） 滝子山



白簾史朗氏講評

カノープスとはラテン語で竜骨座の首星のことをいう。マイナス0.7等の明るい星で長時間露光で美しい軌跡を描く。ただ、この作品については少々露光オーバーで光がすべて飽和してしまっている。カノープスの軌跡も本来は淡黄色にならなければならない。折角、滝子山にまで登ったのだから、もっと美しい夜景富士を見せて欲しかった。露光値は2分の1で良いと思う。

入賞

荒れる山頂 瀬沼 茂雄（東京都福生市） 笹子雁ヶ腹摺山



白簾史朗氏講評

4番山頂付属・笹子雁ヶ腹摺山からの富士山はこれ1枚のみであり、優先順位1で入選した。ワイド四つ切りにそのまま引き伸ばさず、ちゃんとトリミングすれば、もっと良い作品になるのに惜しい。右方が多すぎる。

入賞

初秋

船木 政好 (千葉県松戸市)

奈良倉山



白簾史朗氏講評

本当の快晴の朝。こんなによく晴れた日も珍しいといえる。とって雨上がりでもない。ススキの穂波と山肌の緑とのコントラストが美しい。やや空が多いのが難。次回はちゃんとした応募票を使用すること。

入賞

八重桜咲く頃 井上 和夫（山梨県大月市） 扇山



白簾史朗氏講評

地元扇山のあらゆるところ、あらゆるポジションを知りつくした作者だけにこうしたアングルもものにできる。構成にはいっさい文句はないが、時間的に少々遅くはないだろうか。そのため、もやが昇って富士山がぼやけた感じとなってしまった。春らしいといえはそのとおりだが、やはり富士山にメリハリがあった方がよい。正規の応募票を使うこと。

入賞

厳寒に色づく 北沢 清行（山梨県大月市） 百蔵山



白簾史朗氏講評

これまたみごとな色づきである。美しく澄んだ色相は何ものにもかえがたい。ただ全体に暗く見えることで損をしているが、その理由は下方の暗部が富士山の光に対して大きすぎるからである。右方4分の1、下方5分の1切れば見違えるようになるろう。

入賞

岩殿の春 小谷 加代子（三重県松阪市） 岩殿山



白簾史朗氏講評

最近、岩殿山のサクラが老齢のためか、虫害か何かで花づきが悪いといわれているが、それにしてはよくアングルを見きわめてまとめている。下方の市街地を花むらで隠しての手法はなかなかのものといえる。ただ、右方が蛇足気味、中央部から縦にバッサリ切ると全く違った爽やかな作品に変貌する、一度お試しあれ。

入賞

晩秋

内藤 元次（山梨県大月市）

高畑山



白簾史朗氏講評

秋の高畑山。谷によい雲が生まれて白一色の富士山がよりきわ立った。高畑山は元々は高畑倉山と呼ばれていた山であり、展望も有名だった。左方を少し切って、そのまま右にのぼすとバランスがよくなる。

入賞

夕焼けの空 松本 邦弘（埼玉県入間市） 倉岳山



白簾史朗氏講評

大気中のもやまでが夕焼けの色に染まって赤一色といったところだが、こうした現象はままたることで、何かいつも不気味な感じにおそわれる。思い切って上方を入れ込んだのがよく上下のバランスが整った。が、左右は少し右を切って左方へ寄せた方が、より左方の雲が写り込んで壮大な画面となったろう。

入賞

夜明け前 八巻 長子（山梨県中巨摩郡） 九鬼山



白簾史朗氏講評

九鬼山からの夜景富士も初めてである。全体のバランスに難はなく、露出もほぼ適正といえる。いや、もう少し暗い方がより美しくなると思う。そうすると燈火の色彩がもっと強く鮮やかになったろう。

入賞

冬空に明け行く

三浦 義朗（埼玉県入間郡）

高川山



白簀史朗氏講評

すっきりと晴れた冬の朝、空気までがキーンと音がしように堅く張りつめて
いる。そんな感じのする富士山だ。だが、どうしたわけか、谷間の燈火がほとん
どない。これで燈火の彩りがあれば、さらに美しく豪華になっただろう。

入賞

夕雲輝く 小谷 哲朗（三重県松阪市） 清八山



白簾史朗氏講評

実によい作品である。作品として比較すると最優秀賞に匹敵するものといえるが、残念ながら華がない。夕空にたなびく色づいた雲、その走りと富士山に対する効果は抜群だが、逆光のため、富士山に光がない。PRには不向きなのである。ただし、作品のすばらしさを以って瞑すべし。

総評

審査員長 白籟史朗

第10回秀麗富嶽十二景の審査は恒例によって平成15年1月17日、午後1時30分より審査員5名立ち会いのもと、大月市役所3階委員会室に於いて開催された。今回の応募者総数44名、応募作品数は182点であった。ところが、本年のコンテストは第10回という節目にあたるため、十二景山頂と付属の山頂すべて網羅したいというもともとからの市の意向があった。そうすると2番小金沢山、10番九鬼山、12番本社ヶ丸の3山頂が応募作品中に無く、一度では選出出来ないため、今回の応募者に限ってこの3つの山頂からの作品を再募集することにした。したがって1月17日の審査はその第1回と、暫定的な予備審査にとどめることとして審査に入り選出をした。

一応の選出をした上、入選候補作品をならべてみたが、やはり欠けた山頂があると形にならない。そこで再募集の作品が集まるのを待つ最終決定をすることにして、第1回の審査を終えた。

第2回目の本審査は2月16日、第1回目同様に、大月市役所3階委員会室において午後1時30分より開始された。新たに寄せられた作品は14点、これで応募総数は196点ということになった。応募者数は同数の44名のままである。

審査は、それまでに集まった山頂からの作品が大むね決まっていたので、わりとスムーズに進行、不足の山頂からの作品だけの選出が主としておこなわれた。残された各山頂からの作品は再度募集しても1点しかない4番笹子雁ガ腹摺山をのぞいて、それぞれ2点から3点、そこから止むを得ず3名のダブル入選者を含めた20名23点の作品が決定した。

内容は最優秀賞1点、推薦2点、特選3点、特別賞1点、入選16点の計23点であるが、上位入賞者中の3名がダブル入選となっている。これは作品の質と山頂の関係で何とも致し方なく、応募作品数の多いところほど入選は困難であり、少ないところが有利にはたらくからである。審査する方としてはすべての山頂からの作品をそろえなければならぬため、各山頂の作品が平均して応募されるのを切望しているが、なかなか思うにまかせられない。そして、そこに山頂による質のバラツキが出てくることになり、ダブル入賞が出る結果となる。

しかし、いずれにしても、一応のレベルを凌駕している作品でなければ入賞はしない。今回の入選作品もその意味においてはそのハードルをクリアーしているといつてよく、応募者の層が厚くなり、その分作品の質の向上がみられたといつてよい。

最優秀賞は昨年に引き続き、奈木正次氏が獲得した。氏は10年10回のコンテスト応募でひとり5回という驚異的な確率で最高賞を手中にしているが、それはコンテストの意味を最もよく理解しているからにはほかならない。ただ単に作品の質のみではなく、そこに美しさによって大月市のPRに益するものがないといけない。コンテストという催しのすべてはこれが根本にあることをよく理解して、作品は上質とともに明るさと美しさを加味することが重要である。その点で氏の作品は群を抜いている。だが、奈木氏ひとりに常に名を成さしめることなく、他の方々の奮起を大いに促したい。

推薦の小谷哲朗氏は再度の挑戦の本社ヶ丸からの作品でこれを取り、高津氏は実力での推薦である。これが春夏の作品であったならともに最優秀賞も夢ではなかった。

特選3名もそれだけの実力と実績ある作品であり、高橋氏と小林氏はともに過去最優秀賞作家、ベテラン天野氏は今回もダブル入賞である。

特別賞の工藤氏は格調高い画面構成で美しい画面を作り、他の入選者もすべてそれぞれ持ち味を生かしての作品であって、10回目のコンテストをバラエティあるものとされた。

第11回はさらなる精進によって、より高度の作品を寄せられることと同時に、より多くの山頂からの富士山を応募されることを心より希望し、期待する。